

小児の貧困問題と健康について

連載①

北病院小児科 医師 近藤 知己

日頃の小児科の診療の中で、貧困の問題について遭遇することはそんなに多くはありません。診察の場面で、実は生活に困っていて、と言うような相談は普通しませんし、本当に経済的に困っている人たちは、病院に来ることなく、見えなくなっていると考えています。

子どもの居る家庭の貧困率はどれぐらいかと調べてみると、厚生労働省の2012年の発表では、16.3%と、6世帯に1世帯は貧困家庭ということとなります。この数字は、年々上がっていて、他の先進諸国に比べてみても高く、OECD加盟30カ国の中でも平均より高く、12位という不名誉な順位です。

しかし、この貧困の問題が、子どもや健康にどうした影響を与えるかという資料は、多くはありません。とりわけ日本国内での調査の取り組みが少なく、そこで、2015年の2月に、全国の民医連加盟の病院診療所の小児科を対象に、外来通院患者のアンケートを行いました。北病

院やあじま診療所でも取り組み、ご協力ありがとうございました。このアンケート調査の結果が、出たので紙面を借りて組合員さんの皆さんにご報告したいと思います。

全国54の医療機関、1237世帯を対象にアンケートを実施。712世帯の回答がありました。その中で、貧困世帯は156世帯の22%と全国平均より高いことが分かりました。これは、民医連小児科に通院する患者層を表していると言えます。その中で、保護者から見て、子どもの健康状態が悪いと答えた割合は、貧困群で8.1%非貧困群で5.2%、統計的に見ても、貧困群が高いと出ています。